ISSN 1345-3580

Glocal Tenri

月刊 グローカル天理 Monthly Bulletin Vol.23 No.7 July 2022

天理大学 おやさと研究所 Oyasato Institute for the Study of Religion, Tenri University

7

CONTENTS

・巻頭言
「型」について ③
／永尾　教昭 1

・社会福祉からみる現代社会 ―天理教の社会福祉活動に向けて―（3）
社会福祉は、どのようにして生まれたのか―前近代社会―
／深谷　弘和 2

・台湾の社会と文化―天理教伝道史と災害民族誌（8）
戦前台湾における個人的伝道（1）
／山西　弘朗 3

・ライシテと天理教のフランス布教（29）
20 世紀のライシテ ④
／藤原　理人 4

・イスラームから見た世界（21）
カイロの街角から―天理参考館の現代エジプト展―
／澤井　真 5

・現代宗教と女性（35）
沖縄復帰 50 年に寄せて
／金子　珠理 6

・コロンビアへの扉―ラテンアメリカの価値観と教えの伝播―（22）
6．コロンビアの日常 3
／清水　直太郎 7

・新刊紹介 8

巻頭言

「型」について ③

おやさと研究所長　永尾教昭　*Noriaki Nagao*

型を破った代表例として川石酒造之助という人物を取り上げてみたい。川石は日本ではほとんど無名だが、フランスでは「フランス柔道の父」としてつとに有名である。

現在フランスには、連盟に登録している柔道家が約 50 万人いる（仏柔連 HP）。日本の 3 倍以上である。これほどの隆盛を見るに至ったのは、川石の功績によるところが大きい。

川石は 1935（昭和 10）年に渡仏する。そして後に川石メソッド（川石方式）と呼ばれる方法を編み出す。それは、まず技に番号を付ける。つまり日本語がわからないフランス人のために、大外刈、内股…ではなく、足技 1 号、2 号…、腰技 1 号、2 号…としていった。現在この方式は廃れたが、当時はこれでフランス人の技の上達が早くなった。

次に、帯の色を変えた。日本では初段までは白、初段になると黒帯となっていたが、フランス人は自分の能力を他人に誇示したがると考えた川石は、入門時は白、それから黄、オレンジ、緑、青、栗色と黒帯になるまでにも技量が上がるたびに違う色の帯を付けさせた。これが、フランス人の気性に完全にはまった。

さらに大きな特徴は、フランスでは一般的にスポーツは町のクラブで実施されることから、柔道家が道場の経営もしていくようにした。日本ではオリンピックで金メダルを取るような選手でも、柔道で食べていっているのではなく企業や学校に所属して、そこから給料などをもらい柔道を続けている（事実上は、著名な選手は職場で働かずに柔道だけをしているケースが多いが）。それに対して、川石は柔道家が道場を経営して、そこに習いに来る会員からやや高額とも言える会費を徴収し、それで食べていけるような形を構築していった。いわば職業柔道家を育成していったのである。

ヨーロッパでは柔道自体はフランスよりイギリスに先に伝わった。イギリスで柔道を広めた小泉軍治はいわゆるアマチュアリズムを墨守し、職業柔道家の方式は取らなかった。これが今日、イギリスとフランスの柔道人口に差がついた一つの理由ではないかとも言われている。それ故か、同時代にヨーロッパで活躍した川石と小泉は不仲であった。

しかし、このような川石に対して日本柔道界は、非常に冷淡であった。それは他人と和することを嫌い独善的とも言える川石個人の強烈な個性も原因しているが、同時に川石方式が講道館柔道ではない、言葉を変えれば、異端であると受け取られたのである。「川石の柔道は金儲け主義だ」という批判も強かった。それの証左として、小泉が講道館 8 段を授与されそれなりに厚遇されたのに比して、川石は今日に至るまでこれといった栄誉は受けていない。ちなみに帯の色を変える方式は、今では講道館も取り入れている。

日本では、このように、型を破るということはその目的が普遍性を持たせる、つまり外国人でもその道にアクセスしやすくするという意図であっても、本元から亜流、あるいは異端と批判される場合が多い。宗教も同様で、他国に伝えるためにより普遍的なものにしようとして型を壊すことは批判されるときがある。例えば、天理教の教会神殿内部の正面には「みかぐらうた」第 4 節「よろづよ八首」が掲額されている。しかし、日本語を読めない人には何のことかわからない。だから筆者はヨーロッパ出張所では掲額自体をやめようか迷ったが、結局咎められるような気がしてできなかった。海外布教には、少々の批判を恐れない突破力は求められるだろう。

［参考文献］

吉田郁子『世界にかけた七色の帯　フランス柔道の父　川石酒造之助伝』駿河台出版社、2004 年。